

令和 8 年 6 月 2 日

令和 7 年度 特別の教育課程の実施状況等について

宮城県		
学 校 名	管理機関名	設置者の別
気仙沼市立鹿折小学校	気仙沼市教育委員会	公立

1. 学校における特別の教育課程の編成の方針等に関する情報

学 校 名	特別の教育課程の編成の方針等の 公表 URL
気仙沼市立鹿折小学校	http://www.kesenuma.ed.jp/shishiori-syou/wysiwyg/file/download/1/5815

2. 学校における自己評価・学校関係者評価の結果公表に関する情報

学校名	自己評価結果の公表 URL	学校関係者評価結果の公表 URL
気仙沼市立 鹿折小学校	http://www.kesenuma.ed.jp/shishiori-syou/wysiwyg/file/download/1/5813	http://www.kesenuma.ed.jp/shishiori-syou/wysiwyg/file/download/1/5814

3. 特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

(1) 特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

- ⊙計画通り実施できている
- ・一部、計画通り実施できていない
 - ・ほとんど計画通り実施できていない

(2) 保護者及び地域住民その他の関係者に対する情報提供の状況

- ⊙実施している
- ・実施していない

<特記事項>

保護者及び地域関係者を招いて12月に「海洋フォーラム in 鹿折」を開催し、児童の海と人とをつなぐ探究的な学びの発表を直接聞いていただき、質問や感想だけでなく、学びの広がりや深まりについても意見をいただく機会として設定している。

また、特別な教育課程の編成による学びの目的とその在り方、地域連携による協働性を促進するために、学校運営協議会において現況と成果・課題等を提示している。

4. 実施の効果及び課題

(1) 特別的教育課程の編成・実施により達成を目指している目標との関係

気仙沼市は、震災からの創造的復興と持続可能なまちの未来を標榜するキャッチフレーズに「海と生きる」を掲げている。その具現を目指し、気仙沼市教育大綱には「海と生きるまち」を共に創る人材を育成するため「人を思いやる優しさのため高い倫理感、豊かな感性」「自立し創造的に生きていく力」「郷土に貢献し、世界で活躍するためのグローバルな視点」の3つを基本理念としている。また、その実現に必要な力である、F・I・S・H「先を見渡す力（Foresight）」「本質を見抜く力（Insight）」「道を切り拓く力（Strategy）」「つなぐ力（Harmony）」の4つの育成に努めている。さらには、UNESCO IOCが国際的に重視している海洋リテラシーに関する資質・能力を育成すべく、国内での地域版となる「海洋リテラシーfor 気仙沼」の6つの原則を独自に策定し、本市で育む具体的な資質・能力としている。

本校の教育課程は、これらに沿った資質・能力の育成を目指して設定している。そして、海洋教育に関する特別な教育課程を編成するにあたり、指導のねらいや内容等の関連、学年系統等をより明確にしたことで、教科・領域等の枠を超え、横断・往還を重視したつながりある学びとして展開できている。

さらに、「海と生きる」まちとひとをつなぐ海洋教育で目指す児童像と、その根底にある人間像・社会像を地域と共有できるのが「海洋リテラシーfor 気仙沼」に示された具体の姿だと考え、これを学校経営全体による教育の中で常に意識し、実践することで、児童の探究的な学び方向性や内容による質が高まり、より自分事として、本校の目指している「自分の生き方」「地域の在り方」を考える学びに近づいている。

(2) 学校教育法等に示す学校教育の目標との関係

本校では、市全体で取り組んでいる標準学力調査における経年変化をみると、各学年の国語、算数における学年平均得点率が少しずつ高まってきている。「海と生きる探究活動」に組み入れることでより効果的に育むことを目指した各教科での資質・能力についても、相乗的に向上・変容の成果が見られてきた。また、全国学力・学習状況調査の児童質問項目において、「将来の夢や希望をもつこと」「困った人がいたら進んで助けること」「人の役に立つこと」「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思うこと」などの非認知能力（感性・意思等）について、県・全国と比較して肯定的な回答が多いなど、他者理解や社会貢献についての意識の高まりが見られる。

一方で、上述したような標準学力調査の結果についての上昇傾向はあるものの、算数においては全国平均を大きく下回る学年も複数あり、基礎的・基本的な知識・技能の定着のための指導と学習の必要感を実感させ、探究的な学びによる認知能力（数値学力）を連動させながら高めることが課題となっている。

5. 課題の改善のための取組の方向性

3に示す課題を踏まえ、教科の見方・考え方を高め、学習内容の習得・活用にもつながる探究的な学びになるよう、指導と学びの質を改善することが必要と考えられる。

そのためには、「海と生きる探究活動」という探究的で教科横断・往還的な学びの特性を生かし、児童が自らの強い関心や「問い」をもち、自分や他者、地域にとって意味をもつ課題設定と、それを自分なりに深く取り組むプロセスを重視し、「もっと調べたくなる」、「多くの人に伝えたくなる」、「分かってもらえるように表したくなる」ような単元構想と教員自身の探究心、ファシリテーション的な伴走としての支援がさらに必要である。

また、教科等の横断・往還を前提として特別に編成した領域である「海と生きる探究活動」であるがゆえに、単元構想を立案・改善する段階において、それらを関連させる意図や効果を念入りに吟味検討し、関連する教科の位置付けとその効果、融合させることの有意義性などを重視し、探究的な学びと教科等での習得・活用を相乗的に成し得る単元構成や学習過程の工夫・改善を一層重点的に進めていくことも必要である。

特別な領域「海と生きる探究活動」の年間計画については、毎年度、児童の実態と学びの経緯、前年度の実践反省を基に改善しているが、時数に対してカリキュラム・オーバーロードの感は否めない。本来は手段として位置付けた活動が目的化してしまっていたり、児童が自分の「問い」とじっくり向き合うための「余白」が乏しくなっていたりすることが新たな課題となっている。児童の学びの効果を上げるため、充実と精査の両面のバランスを検討しながらブラッシュアップしていく必要がある。

なお、教育課程の特例として特別に編成した「海と生きる探究活動」とは別に、総合的な学習の時間においては「防災」に関する学習（防災・減災に関する知識理解・思考判断・行動等）を重視した内容構成として扱っている。本市の中でも特に震災被害が大きかった当学区では、地域と連携した防災（自助・共助・公助）を通して、「生命を守る」ための学びが重要である。特に昨今は、海洋環境の変化に伴う気象系災害も地域を問わず、頻発化、激甚化してきていることから、「防災・減災」と「海と環境・生態系」とを「生命」を軸として関連付けながら、「海と生きる」ための資質・能力を一体的に育んでいく必要がある。